

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 2 日現在

機関番号：32406  
 研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2010～2012  
 課題番号：22520602  
 研究課題名（和文）ピア・ラーニングを利用した英語ライティング活動-言語への気づきと模範文の役割-  
 研究課題名（英文）English Writing Activities Using Peer Learning: Noticing of the Language and the Role of Model Text  
 研究代表者  
 阿部 真（ABE MAKOTO）  
 獨協大学・外国語学部・講師  
 研究者番号：70553626

研究成果の概要（和文）：本研究では、複数の学習者が協働的に英作文を書く活動において、どのようにライティングに関する問題を解決するのか行動を調査した。2010年度は、タスク遂行中の「作文」「見直し」「書き直し」の3段階における6組のペアによる対話を分析し、問題解決行動を分類した。2011、2012年度は、前年度の分類基準を用いて作成された項目と自由記述項目を含む質問紙を作成し、協働的ライティング行動をより詳細に調査した、ライティングの側面と協働の様相の違いと書かれた作文の質を分析した。

研究成果の概要（英文）：This study investigated how English learners can collaboratively write English texts and how they can be involved in problem-solving behavior. In the 2010 academic year, the participants' dialogues observed in the three states (composing, reviewing, and revising) were analyzed to explore their collaborative behavior. During the academic years 2011 and 2012, a questionnaire has been developed and modified using the categories emerged in the first year, to deeply explore the characteristics of learners' collaborative writing processes and resulting written products.

### 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：英語教育学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：ピア・ラーニング、ライティング、第二言語習得、英語教育

#### 1. 研究開始当初の背景

近年、大学の英語教育においては教師主導の知識の教授だけではなく、学習者が主体的に知識を構築していく協働的な学び（ピア・ラーニング）に重点が置かれている。英語のライティング指導においても、教師が明示的にライティングの典型的なレトリックを教

えるだけではなく、学習者が他者と協働して、何をどのように書いたら良いか話し合いながら最終的な英文にまとめていく活動が必要である。しかしながら、ライティング教育においては、英作文を書いたあとに学習者同士が互いの英作文についてコメントし合う活動（ピア・フィードバック）が一般的であ

り、書く内容の案を考えてから、計画し、書き上げるところまでの全てを複数の学習者で行う、協働的ライティングを授業内に行う活動の研究や実践報告はそれほど多くなかった。したがって、大学での英語ライティング指導に、どのように協働的ライティングを導入するか、その際、教師はどのように学習者同士の学びをサポートすることができるかを関心の中心に置いた研究が必要であった。

協働的ライティング、とりわけ、2人1組の学習者が英作文を書くことの効果に関しては、海外の研究に多い。Storch (2005) は英語圏で英語を学習する留学生に対する授業において協働的ライティングを導入し、書かれた作文を分析した。結果は、協働的ライティングによる英作文は個人によるものよりも文法的に正確なものであった。Shehadeh (2011) は、非英語圏で英語を学習する大学生に対する授業で、同様の実践を行い、協働的に書かれた作文のほうが、内容、構成、語彙において個人によるライティングよりも優れていたことを報告している。これらの専攻研究の成果を参考に、日本国内の大学での協働的ライティングのより詳細なデータの収集・分析を通して、知見を積み重ねていく必要があった。

## 2. 研究の目的

上記のような背景から、本研究は協働的ライティング活動を2人1組の大学生が1パラグラフの英作文を書き上げる活動に絞り、作文中の学生間の対話の分析と、書かれた作文の分析を目的とした。年度別には、2010年度は、授業時間外に実験的に行った6組12名の協働的ライティング(作文、見直し、書き直しの3段階で行った)を、主に対話データを分析し、学習者の行動をカテゴリー分けすることを目的とした。2011年度は、前年度の分析結果を基に、質問紙を作成し、授業内で行われた協働的ライティングにおいて、作文、見直し、書き直しのどの段階で、どのように問題を解決することができたかの全体像を把握することを目的とした。2012年度は、段階を作文段階に絞り、より詳細な情報を得るため質問紙を改訂し、協働の様相を調査すること、また、書かれた作文を分析することを目的とした。

## 3. 研究の方法

2010年度は日本の私立大学の12名の対話データを質的データ分析法であるグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。具体的には、協働的ライティングタスク遂行時の学習者ペア間の対話(作文、見直し、書き直しの3段階それぞれに関して)を録音し、プロトコルデータを得、対話を内容

に応じてアイデア・ユニットに分節し、比較・分類を通して、それぞれのユニットを、それらを包摂する上位カテゴリーにまとめあげていった。

2011年度は、前年度に得られたカテゴリーを基に4件法による10個の質問項目(作文、見直し、書き直しの3段階において、良くできたと思うこと)と3個の自由記述からなる質問紙を作成した。10個の質問項目は4件法を用い、「語彙」3項目(例. 項目1「適切な単語を思い出すことができた」)「形式」4項目(例. 項目5「内用語の適切な使い方が分かった」)、「内容」3項目(例. 項目8「絵の中の何を書いたら良いのか分かった」)からなり、自由記述は、書く段階において項目1から10以外によくできたと思うことは何かを問うもので構成した。この質問紙を使用した調査は、日本の2校の私立大学におけるライティングの授業で協働的ライティングタスク終了後に行った。10個の項目の回答値は、記述統計量を算出し、各段階では「語彙」「形式」「内容」のそれぞれの回答の平均値を検討することに、自由記述は質的データ分析ほうであるKJ法を用いて、より詳細な協働の様相(どのように協働していたか)に関するカテゴリーの抽出を試みた。

2012年度は、前年度の質問紙調査の結果、特に、得られた協働の様相のカテゴリーをもとに、質問紙の改訂を行った。新たに作成された質問項目はライティングの3観点8項目(語彙に関する3項目、形式に関する3項目、内容に関する2項目)と協働の4様相(協力、自分の貢献、他者からの補助、相違の発見)を組み合わせた32項目と、ライティングについての学習習慣、得意意識、ペアワークやペアでのライティング活動の経験や肯定的態度などを測る5項目を含む、計37項目から構成された。質問紙調査は、日本の2校の私立大学の協働的ライティング実践後に行われた。また、同実践において学生ペアによって書かれた英作文は「流暢さ」(総語数、総語数/T-Unit)、「複雑さ」(S-nodes/T-Unit、Guiraud Index)の観点で測定された。

## 4. 研究成果

2010年度の研究によって、協働的ライティングタスクにおける、学生ペアの行動を分析するカテゴリーはライティングの8観点(語彙、形式、内容に3分類される)と協働の4様相であった。

### [8観点]

- (1) 知らない単語をどのように処理するか
- (2) 複数の候補の中からどの単語を選ぶか
- (3) どのように語を言い換えるか
- (4) どのような語法(動詞のあとの前置詞など)を使うか

- (5) どのような文法（時制など）を使うか
- (6) どのように正しい綴りを書くか
- (7) 絵の中の何をどの程度細かく書くか
- (8) このタスクは何をするべきか

2011年度は協働的ライティングタスク遂行の段階別に「良くできたこと」について調査した。作文段階においては、語彙に関する問題の解決ができた度合いが最も高く、それに対して、内容に関する問題解決は最もできた度合いが低かった。それに対して、見直し段階においては、内容に関して見直すことができる度合いが最も高く、語彙に関しては最も度合いが低かった。書き直し段階においても、内容が最も度合いが高く、語彙が最も低かった。ライティングの語彙、形式、内容に3つの側面に関して、できることの度合いを比較することは難しいが、段階の違いによって、できたという意識が高まる度合いが異なる可能性が示唆された。また、自由記述の分析した結果、協働的ライティング中に意識の高まった言語以外の要素、協働の様相は以下の4つに分類された。

#### [4 様相]

- (1) お互いに意見を出し合うなどして、協力してタスクに取り組む（協力）
- (2) 自分が表現や内容に関して提案する（自分の貢献）
- (3) 表現や内容などに関してパートナーが補ってくれる（他者からの補助）
- (4) 自分とパートナーの違いに気づく（相違の発見）

2012年度は作文段階に絞って、ライティングの3観点と協働の4様相について調査した。2011年度につづいて、作文中にもっとも「良くできた」という意識が最も高まるのは語彙であることが確認された。様相の中では、「協力」と「他者からの補助」が占める割合が大きかった。

プロダクトの流暢さに関する指標は語数が平均 97.06（標準偏差 19.80）で総語数/T-Unit が 10.04（標準偏差 1.66）であった。複雑さに関する指標は S-nodes/T-Unit が平均 1.36（標準偏差 0.19）、Guiraud Index が 7.09（標準偏差 0.56）であった。これは、大学生を対象に指標を計算した専攻研究と比較して、同じような習熟度をもった学生が個人で書くライティングと数値が似ていた。

学習者の学習習慣や協働的ライティングなどに関する態度に関する質問項目の回答値（最大値は 5）の平均は以下ようになった。項目 1「日常でまとまった量の英語を書くことがありますか？」、項目 2「英語でまとまった量の英文を書くのは得意ですか？」はそれぞれ、1.92、1.98 とそれほど高い値で

はなかった。ここから、大学生にとって、英作文という活動が日常的なもの、または得意だと言えるものではないことが示された。また、項目 3「ペアで英語を書いた経験がありますか？」、項目 4「ペアで英作文を書くことは効果的な学習方法だと思いますか？」、項目 5「ペアで外国語を学習することは効果的な学習方法だと思いますか？」の平均はそれぞれ 1.79、3.40、3.75 であった。協働的ライティングの経験は多くないが、ペアワークそのものへは総じて肯定的な態度をもっていることも示された。

以上のような研究成果から、大学における外国語の授業に協働的ライティングを導入することに関して以下のような知見を得た。まず、学習者ペアは教師の介入の少ない状況でも、語彙や形式といった言語的要素だけではなく、内容やタスクの性質に関してなども、協働的に問題解決にあたることができることが確認された。また、ペアを組む学生による問題解決が可能である事項は、語彙、形式、内容などのライティングの側面、または、協力、貢献、補助、相違の発見など協働の様相によって異なることが明らかになった。さらに、作文、見直し、書き直しなどの段階別に協働的ライティング活動を導入し、特に、見直し段階では、模範作文などの外的なツールを提供するところで、ペア間の対話を活性化し、様々な学習の機会を提供できることが示唆された。今回の調査結果の一部に見られるように、協働的ライティングとは学習者にとって経験がないため未知の要素が多いが、実際にやってみると興味深く、有用であると感じられる要素を多く含んでいると認識する学習スタイルである。教師はそのような要素を考慮して授業の活動を構成し、協働的ライティングをより有益にするための実践例の積み重ねが重要であるだろう。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

- ① 阿部真・山西博之「大学英語教育における協働的ライティング学習の可能性—グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づいた分析の試み—」*Language Education & Technology*, 50. 2013（印刷中）、査読有
- ② ABE Makoto, Scaffolding and knowledge co-construction in collaborative L2 writing. *Learning Learning*, 17 (1), 7-15, 2010, 査読有

〔学会発表〕（計 6 件）

- ① 阿部真・山西博之「協働的英語ライティングの効果検証」『日本教育心理学会第54回総会』2012年11月23日、琉球大学
- ② 阿部真・山西博之「協働的L2ライティングにおけるプロセスとプロダクトの分析」『外国語教育メディア学会（LET）第52回全国研究大会』2012年8月9日、甲南大学
- ③ 阿部真・山西博之「協働学習を取り入れた英語ライティング指導の可能性」『外国語教育メディア学会（LET）第51回全国研究大会』2011年8月7日、名古屋学院大学
- ④ 阿部真・山西博之「大学での段階別英作文指導における協働学習の効果」『日本教育心理学会第53回総会』2011年7月24日、北海道立道民活動センターかでの2.7
- ⑤ 阿部真・山西博之「ライティング学習における協働的対話の分析—模範文の役割に焦点をあてて—」『第38回全国英語教育学会大阪研究大会』2010年8月8日、関西大学
- ⑥ ABE Makoto, Output, Comparison, and Revision: An Investigation into the Patterns of Dyadic Interaction in a Three-staged L2 writing task. Paper presented at the *34rd Annual Congress of Applied Linguistics Association of Australia*, 2010/07/06, The University of Queensland, Australia

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

阿部 真 (ABE MAKOTO)  
獨協大学・外国語学部・講師  
研究者番号：70553626

### (2) 研究分担者

山西 博之 (YAMANISHI HIROYUKI)  
関西大学・外国語学部・准教授  
研究者番号：30452684

### (3) 連携研究者

なし